

第2章

現状と課題

第2章 現状と課題

1. 体力向上事業が対象とする児童・生徒

本事業が対象とした児童・生徒は決して最初から運動が好きな、また日常的にスポーツ活動に取り組んでいる子どもばかりではない。二極化が指摘される現状を踏まえた、運動に対する興味がないようなあるいは喪失したような少なくない子どもたちの存在を前提としていた。こうした子供たちの存在を前提とした活動として、計測結果、特に結果として子どもたちが序列化されやすい走タイムや跳躍高それ自体を他の子どもにすぐにわかるように読み上げたり、表面的な結果のみで序列化したりすることは避け、あくまで能力特性としてその結果の背後にある原因や要素に注意を向けさせるよう配慮することを課題とした。

また、体育の授業で運動を行うことに対する積極的な構えや動機づけを行うため、楽しい運動遊びをウォーミングアップを兼ねて導入することにして、スムーズな導入が可能となるようにした。それとともに、各測定種目の合間や終了後の時間を無駄にすることなく、運動への興味を喚起し、少しでも運動習慣の確立につなげることを課題とした遊びを指導することも本プロジェクトで学校訪問した際の課題とした。

2. 学校体育においてスポーツ科学、体力科学の成果を十分に活用する必要性

現在の小学校は教科担任制をとっていない。そのため日々進化するスポーツ科学の成果や新たに開発された便利なテクノロジー、それらを用いた分析手法などが正式なカリキュラムや教育内容として学校に導入されるには長いスパンを要している。しかしそうした最新のテクノロジーの中には、極めて効率よく子どもの体力や運動能力の向上に役立つものがあり、従来の研究のみに用いられてきた機器に比べて安価で活用することが可能となっている。それらを有効に活用することは現在の体力の低下を食い止め、子どもの運動習慣を確立していくうえでも急務であると思われる。そこで、最新の科学を手軽に現場で使える手法を習得している大学や民間団体を活用することにより、学校体育においてそうした最新のスポーツ科学の成果、体力づくりの手法をいち早く活用することが可能であると考えた。

こうしたコンピューターや通信機器と連動した最新のテクノロジーを学校現場で使用するにより、デジタル世代といわれる現在の子どもたちの、スポーツや身体運動に対する旧態依然とした認識の変容に迫れるのではないかとも思われた。

3. 見えていない潜在能力に気づかせ、見えるようにしてあげることの意義

子どもは能力によって差別されたり序列化されたりすることを嫌う。特にスポーツ活動や運動活動はだれの目にもその成果が見えるため、苦手な運動にはあえて全力を発揮しなかったり、積極的に取り組まなかったりする傾向が強い。その結果自分は足が遅い、運動神経が鈍いと諦めてしまっている子どももいる。

しかし物心のついた幼少時から走るのが嫌いで活発な運動を行うことが嫌いな子どもは多くないはずであり、少しでも速く走りたい、できることなら自分の能力を伸ばしたいと考えているはずである。自分が走るタイムを短縮できる可能性、努力すればそれが可能となる潜在能力を持っていることに気づかせてやれば、もう一度チャレンジしようという気持ちを持たせることが可能だと思われる。問題は本当にそこを改善すればパフォーマンスの改善につながる強化ポイントを指導する側が見つけられるかどうか、さらに効果的なトレーニングを指導できるかどうかである。

4. 運動・スポーツの楽しさを体感できるようなさまざまな活動やゲームに触れる

日常の学校生活で体育の授業以外に身体活動を行わないという子どもは、友達と全身を使い走り回って遊ぶような活動の楽しさを忘れかけているのではないだろうか。運動習慣がないという場合、その機会が提供されていないだけでなく、そうした欲求自体が後退してしまっている可能性がある。そうであれば全身をつかって友達と走り回るような運動の機会を提供し、そうした活動の楽しさを思い出させる、あるいはそうした活動の楽しさに気づかせることで、さまざまな身体活動プログラムへの参加を促すきっかけになるかもしれないという期待もあった。